研究ノート

エルヴィン・パノフスキーの生涯と業績（2）*

江藤 匠

4. アビ・ヴァールブルクとの出会い

パノフスキーがフライブルク大学哲学部で学位を取得した1915年は、同じ学部でマルティン・ハイデガー（1889–1976）が大学教授資格を取得した年でもあった。ハイデガーは、哲学教授のハインリッヒ・リッカートの下に『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』を提出し、7月27日に試験講義「歴史科学における時間概念」を終え、冬学期から哲学部の私講師となった[1]。このパノフスキーとの門出の偶然の一致は、両者の思想の共時性を示唆している。筆者はすでに、ハイデガーの現象学的解釈学（phänomenologische Hermeneutik）とパノフスキーの方法の類縁性については論じてきた[2]。

さてこの年、当時ハンブルクに在住していたアビ・ヴァールブルク（1866–1929）との出会いがあった。12月27日に、ゴルトシュミットはゼミナールの三人の学生カウフマン、ヘッカー、パノフスキーを伴って、ヴァールブルク邸を訪れた。そこでパノフスキーは、前年クンスト・ハレの館長に就任したばかりのグスタフ・パウリ（1866–1938）と、フライブルク大学でフェーゲを聴講していたハンブルクの若き美術史家カール・ゲオルク・ハイゼ（1890–1979）、そして1912年にウィーン大学のドヴォルシャックの下にレンブラント研究の学位論文を提出し、イタリアで中世写本における占星術に関する研究をしていたフリッツ・ザクスル（1890–1948）にも出会っている。一同は、ヴァールブルクの講演の後、そろって会食したという[3]。

パノフスキーは、このハンブルク訪問を前にして、ヴァールブルクとの文通を始めている。その最初の手紙は1915年11月9日に認められた。

> 大変尊敬する教授殿、私は信頼できないことに対する疑念を持ち続けたくはありませんし、あなた様にもわざわざ（ひょっとして後で）調べるお時間を取らせたくはありませんが、ヴィクホフが小著作集第二巻の258頁で、ローマの遺体〔蝋製胸像〕について述べている箇所についてお伝えしたいと思います[4]。ヴィクホフはその蝋製胸像について、クリスティアン・ヒュルゼンが1883年の『オーストリア歴史研究所紀要』[5]に発表した論文の433頁以下の一節に依拠した、その報告者のファンタジーによってのみ美化された外観についての陳述を拠り所としてしまった事です。敬具。あなたの崇拝者、E. パノフスキーより[6]

ここで問題となっている蝋製胸像は、19世紀にフランスのリールの美術館にあった女性頭部のことである。その存在は1485年以前から知られており、すでにヘンリー・トーデなどによって、ラファエロなどのルネサンス期の芸術家に影響を与えていたと推定されていた[7]。起源については、古代ローマとする説と、それをモデルとして15世紀フィレンツェの蝋細工師がエクス・ヴォートとして制作したとする説などがある[8]。この文面からはどのように解釈すべきか、筆者には些か心もとない。それに対してヴァールブルクは、11月24日に返信している。

拝啓博士殿、9日付のあなたの手紙に心より感謝します。私は、かれこれ私の図書室にあるヒュルゼンの論文の抜刷りを調べてみました。ヴィクホフは非常に一面的に参照しているように思います。なぜならヒュルゼンの証言も、他の証言も、そこで強調されているのはローマの遺体の際立った妙な生々しさなのです。今日、私はウィーンから別の『報告』も受け取りました。1905年の『帝室中央委員会報告』[9]の図版3には、リーグルの肖像写真と255頁にはドヴォルシャックの追悼文が掲載されています。また1905年の『伝記年鑑とドイツ人の追悼文』第10巻[10]には、ベッテルハイムによる追悼文があることをお報せします。

二三日前にゴルトシュミット教授に、ベルリンの学友たち招待の件繰り返し伝えました。私は、12月27日から30日の間に、場合によってはもう少し後になるかもしれませんが、私の図書室で皆様方にお会いできることを心待ちにしております。敬具[11]

ここでヴァールブルクは、ヴィクホフやヒュルゼンがリールの女性像を、そのローマ的な特徴から古代の作例としてしまったことを批判しているのであろうか。いずれにしても、古代とルネサンスの問題が議論されていることは間違いない。こうした手紙から、ヴァールブルクとの交流が始まった。

5. ドロテーア・モッセについて

パノフスキーは1916年4月9日に、同じゴルトシュミットのゼミにいた、ドロテーア・モッセ（Dorothea Mosse, 1885–1965）と結婚することになった。それに先立って2月6日土曜の夜に、ヴィルマースドルフ、リヒテンシュタイン・アレー2Aのモッセ家で、二人の学友カウフマンとシェンクを招いて、ささやかな祝宴が催された[12]。その夏には新婚旅行として、バンベルクに一週間ほど滞在している[13]。その後の家庭生活については、改めて詳述するつもりである。

ドーラ（ドロテーア）には美術史研究者として、『ユトレヒト詩編』、プッサン、ワトーについての論文がある[14]。パノフスキーとの共同研究では、『パンドラの匣』や、『フォンテンブローのフランソワ一世のギャラリーの図像』[15]が知られている。前号でも触れたように、ドーラは法学者の父親に伴って幼少期の四年間を日本で過ごしている。この事実が斯学では余り知られていないこともあり、本章ではなるべく多く頁を割いて紹介したい[16]。

父親のアルベルト・モッセ（Albert Mosse, 1846–1925）は、現在はポーランドに帰属するプロイセン領グレーツ（Grätz）にユダヤ系医師の五男として生まれた。その兄弟はモッセ・ファミリーとして、いずれもドイツ帝国内で大成した[17]。アルベルトは、1865年にベルリン大学法学部に入学、主に自治制度の権威であったルードルフ・グナイスト教授の下で学び、1868年に第一次国家試験に合格、プロイセン法務省に司法修習生として入り、普仏戦争に従軍後1873年に第二次国家試験に合格している。モッセと日本との関わりは、1870年からベルリン大学で地方制度や行政法を学んでいた青木周蔵――後の駐独公使で外務大臣――と知り合ったのが切掛けであったといわれる[18]。モッセは、1879年から日本公使館の法律顧問となり、1886年（明治18年）5月に山県有朋内相の内閣顧問として日本に着任することになった。そして専門の自治制度ばかりでなく、明治22年に発布される明治憲法の起草から、いわゆる不平等条約の改正にまで尽力した。

モッセのこれらの献身は、彼がユダヤ系であったことと関係しているといわれる。師のグナイストから、帰国しても現状のプロイセンでは司法官としての道は閉ざされていることが告げられていた。そのためモッ

セは日本で認められ、大審院の外国人判事として登用されて、そのまま留まることを考えていたのである[19]。結局モッセは、1890年（明治23年）4月に半年間の休養を取るため帰国するが、その間にケーニヒスベルクの控訴院判事に任命されて、再び日本に戻ることはなかった。この任用については、在日ドイツ公使テオドア・フォン・ホルレーベンの推挙があったという。ホルレーベンは、モッセが日本に戻ることを前提に、日本における影響力を増すために、プロイセン政府に任用を進言したのである[20]。しかしモッセは、控訴院判事から昇進することなく、1907年に60歳で法務省を退官、ベルリン市の市参事会員となり1920年の辞任まで交通局の局長などを務め、ベルリン市長から「ベルリン市の法律の良心（Das juristische Gewissen der Stadt Berlin）」と呼ばれた[21]。

さて話をドロテーア・モッセに戻そう。1885年7月24日にベルリンで生まれたドーラは、アルベルトとリーナ夫妻の第二子だった。ドーラは、姉のマルタと共に1歳から5歳近くまでを日本で過ごし、その間に弟のヴァルターとハンスも生まれた。モッセ滞日中の書簡集『まるで自分の祖国のよう』（1995）には、マルタと一緒にキモノ姿で座ったドーラの写真や、鎌倉の大仏前で撮った家族の写真が掲載されている[22]。マルタの回想によれば、日本へも同行したキリスト教徒の乳母ネゲ夫人の影響が大きかったという。彼女の繰り言、「あなたは、決して自分のことを気遣ってはならない。愛する神はあなたのすぐ傍に立っているのですから」は、幼少の頃より深く心に刻まれていた。ドーラは、一歳年上の姉マルタと共に「とても熱心な」生徒として、「アルンハイム高等女学校（Arnheimsche höhere Töchterschule）」で学んだ[23]。姉妹は、ラテン語とギリシア語は個人教授によって習い、ヘルマン・フォーゲルシュタインというリベラルなラビから宗教教育も受けていた[24]。そして1903年に卒業したが、大学入学許可者（Abiturientin）ではなかった。ドイツの大学で女性の入学が完全に認められるようになったのは、1909年からだったという[25]。

姉のマルタは、1907年に家族がケーニヒスベルクからベルリンへ引っ越してから三年間は歌唱を学んだが、1910年に自身の才能が人生の目的に適っていないと感じ、無給だが遣り甲斐を感じた「ドイツ青少年福祉センター（DZfJ）」で働くことにした。その後ハイデルベルク大学で聴講生（Gasthörerin）の身分で法学などの講義を受け、アビトゥーアを持っておらず、ラテン語の知識にも乏しかったにもかかわらず、提出された論文『子供の教育を受ける権利』によって、1920年8月「優（insigni cum laude）」の成績でハイデルベルク大学から法学博士号を授与された。そしてベルリン警察本部の担当官助手を皮切りに、1926年にはプロイセンで最初の女性警察署員（etatsmäßigen Beamtin）に任命された[26]。筆者は、この姉マルタの経歴から考えて、ドーラが正規のベルリン大学の学生であったのかどうかについては疑念を持っている[27]。ゴルトシュミットのゼミを聴講していただけなのかもしれない[28]。

マルタについては、ナチス政権下の後日談がある。独身だったマルタは、他の三人の兄弟姉妹がアメリカに移住したのに対して、1933年4月に職務を解雇されてからもそのままユダヤ人協会で働いていた。マルタに強制収容所送りが迫っていた。この窮状を見かねた元駐日大使ヴィルヘルム・ゾルフの未亡人ハンナが、日本大使館を仲介してその救済を訴えたのである。その結果マルタは、1943年6月にアウシュビッツ収容所ではなくテレージエンシュタット収容所に送られ、「別格（Prominente）」として戦後まで生き延びることができた[29]。

6. ハンブルク大学の私講師着任

パノフスキーは1920年の冬学期から、ハンブルク大学で私講師（Privatdozent）として講義を開始するこ

とになる。そこに至るまでの経緯を簡単にまとめておきたい。パノフスキーは第一次大戦中の1915年に学位を取得した。すでに1912年に一年間の兵役に服していたが、その後は落馬事故により兵役を免除されていた。1917年の初めに夫妻は、戦時動員により第一軍管区司令部で働くため、司令部のあるカッセルに引っ越し、そこで長男のハンスが生まれている。しかしその年の9月に、今度はベルリンの石炭配給の役所に派遣され、1919年1月の戦時動員解除まで戦時局の石炭配給部門にいた。その年の4月24日に、次男のヴォルフガングが生まれた[30]。

その間にも、教授資格試験の場を捜していたパノフスキーは、1918年12月19日にハイデルベルク大学哲学部に「美術史の私講師認可」の申請書を提出している。論文として、『ミンデン大聖堂の西正面建築とヒルデスハイム、コルヴァイなどとの比較に関する論文』を提出することになっていたが、この申請は「特別な事情により」取り下げられた。その後、「ミケランジェロの様式」に関する論文を1919年の冬の初めまでに準備し、テュービンゲン大学の哲学部に提出することが企図されていた[31]。

しかし翌年早々、ハンブルクのクンスト・ハレ館長グスタフ・パウリから、戦争で開設が中断されていたハンブルク大学が開校したので、そこで私講師になれる可能性があるという知らせをパノフスキーは受け取った[32]。ハンブルク大学哲学部の当初の設立趣旨には、美術史は考慮されていなかったが、美術史のセミナーが一つもなかったことを憂慮したパウリは、1919年の夏学期から芸術工芸博物館の館長マックス・ザウアーラント等と共に講義を始めていた。すでに民俗学の教員ポストは決まっていたが、別に美術史学の教員ポストを設けることが1919年8月に大学の委員会に申請された[33]。しかし市には、新たな教員に支出するだけの予算はなかった。この点について、パノフスキーは次のように述懐している。

> この〔ドイツの大学制度の〕幾分矛盾した性格というのは、第一次世界大戦後の困難な時代に特に顕著になってきた事が、私の個人的な経験から説明できるかもしれない。1920年に私は、（招聘されて）その前年に設立されたハンブルク大学の私講師（Privatdozent）になっていた。私は、私の学科の唯一の「常勤」の代表だった（他の講義やセミナーは、地元の美術館の館長や学芸員が行っていた）。そのため私は生まれたばかりの美術史セミナーの専任として、学位取得希望者を受け入れて審査するという異例の特権を与えられた。しかしながら、私は奉給を受け取っていなかった。1923年の急激なインフレによって私の個人的な財産を使い果たしてしまった時、私は私が無給で監督するセミナーの有給の助手だったのである。この私自身の助手になるという面白い地位は、ある好意的な理事会によって作り出された。というのも、助手に支払われる給料は、講義委嘱に支払われる額より幾分高かったからである。私は1926年に、員外教授（extraordinarius）の地位を飛ばして正教授に指名されるまで、この地位にあった[34]。

このパノフスキーの記述は、子息のヴォルフガングの証言とも一致している。

> 1923年の急激なインフレーションは貨幣価値を下落させ、私の母は父が給料を手にするや否や、すぐに郊外の農村に卵や野菜、肉の買い出しに行かなければなりませんでした。郵便切手の額面金額は何十億マルクに達したが、その時ナチがやってきたのです。ハンブルクは、ナチに屈したドイツ最後の都市の一つだった。（中略）

> ハンブルク時代を通して、私の家族の収入源は先細りでした。私の父はハンブルク大学の正教授になるまでは、本当の給料はもらえなかったのです。その後ですら、月給は支出を賄うことはできなかった。私は、しばしば家財を処分しなければならなかったことを思い出します。もっとも、これには良い面もあったのです。私たちがドイツを離れる時、ナチは財産を持っていくことを認めませんでしたが、もう何も残っていなかったのですから問題はなかったのです[35]。

さて話を、パノフフスキーの大学教授資格試験（Habilitation）にまで戻そう。1920年5月13日に資格試験の申請が出されたとき、これまでに公刊された論文だけでなく、そこに新たな論文が加えられた。審査委員会には、学部長の歴史学者マックス・レンツ、哲学者のエルンスト・カッシーラー、民俗学者のオットー・ラウファー、そしてパウリが出席した[36]。試験講義（Probevorlesung）は7月3日に決定され、学部から「一般的様式発展の図解としての人体比例の発展」の講義題目が与えられた[37]。この時の様子については、最も初期の弟子だったエドガー・ヴィントが記憶している。

> 当時私は、まだパノフスキーには会っていませんでした。パノフスキーに書いた最初の手紙で、彼と一緒に研究できるかと問うた時、彼はまだ大学教授資格試験を受けていなかったのです。そのため彼は、大学の通知で自身の試験講義の後まで結果を待つように、個人的資格で手配してくれました。そこで私は、私の指導者の試験講義（Probevorlesung）を聴くというめったにない特権を得ることができたのです。それは高度に弁証法的な課題で、芸術家のタイプとして、レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロを比較し、爆竹のように反定立が炸裂しました。その頃パノフスキーは、ロマンチックな風貌をしていました。（殆どニーチェ主義者のような）厚い口髭が彼の上唇を覆っており、両耳の前には長い頬髭が垂れ下がっていました。それは輝く両目を際立たせおり、広いおでこは、もうすでに後退し始めていた長い黒髪に覆われていました。彼の顔は、信じられないかもしれませんが、むしろほっそりしており、表情は沈んでいました。私の学位試験の日（1922年7月22日）[38]、私たちは偶然通りで出会い、同じ方向を歩きました。私たちは長く愉快な会話を交わしましたが、大学が近づくにつれて、彼は突然私たちの親しさが公的な場では相応しくないものと感じたのかもしれません。そこで彼は建物の周りを歩いている間に、私に先に行くように指示しました。彼が到着すると、私に生涯で初めて会ったように挨拶し、そして一時間後には、通りで始めた会話を再開していました[39]。

ヴィントは、ここでは「人体比例」の講義のことではなく、教授資格論文のことに言及しているのかもしれない。提出された『ミケランジェロの造形原理、特にそのラファエロの造形原理との比較において』は、長い間行方不明になっていが、2012年6月にミュンヘンの中央美術史研究所の地階のキャビネットで発見された[40]。

こうしてパノフスキーは、1920年の冬学期から週三時間の私講師としての講義と、週二時間の私的な美術史演習を開始することになった。私講師時代の講義と演習の題目は以下の通りである。1920/21年冬学期「その時代の枠におけるミケランジェロ」の講義と「デューラー問題」に関する演習、1921年夏学期は、「初期ネーデルラント絵画」と「レンブラント」についての講義と「イタリア・ルネサンスの建築史」の演習、1921/22

年と1922/23年の冬学期は連続して「初期ネーデルラント絵画」及び「中世のドイツ美術」、1923年夏学期と1923/24年の冬学期は、「イタリア・ルネサンスの造形美術についての導入:15世紀」、1924年夏学期は、「イタリア・クワットロチェント絵画：継続」、1924/25年の冬学期は、「ラファエロ、ミケランジェロ、コレッジョ」である。演習への参加者は、5セメスター以上の論文提出の上級者12名に制限され、ラテン語、イタリア語、後にはギリシア語も必須とされた[41]。ヘクシャーは、このゼミについて次のように回想している。

> パノフスキーは、あらゆる講義、あらゆる新しい出版物において飛躍的に成長していきました。私たちは彼の講義の終わるのを待ち伏せしていて、よく一緒に彼のアルテラーベン・シュトラーセ[42]の快適なアパートへ付いて行き、しばしば翌日の明け方まで議論し話し合いました。パノフスキーが自ら創り上げた「ハンブルク・ゼミナール」は、その文化的環境と呼びうるかもしれない故に、ヨーロッパにおける美術史センターの中でも、際立ったものだったのです[43]。

（つづく）

註

* 筆者は、前号で（1）を上梓してから、全く同じタイトルの「【研究ノート】エルヴィン・パノフスキーの生涯と業績」という論考が、『成城文芸』（240号、2017年6月刊行）に掲載されていることを知った。著者は、成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科（独文学専攻）の名誉教授高木昌史氏である。論考の内容を検討したところ、すでに筆者が言及したパノフスキーの『ドイツ語論文集』（1998）の緒言と『書簡集』（2001）の序文（註30参照）とほぼ同じ趣旨であることが分かった。しかも高木氏は、そのことを文中で明記しておらず、学術的な手続きに問題があることを指摘しておきたい。

1 茅野良男『ハイデッガー』講談社、1984年、242頁。1909年にフライブルク大学神学部に入学したハイデガーは、フェーゲの講義も受けており、歴史学教授フィンケとも関係が深かった。

2 江藤匠「『解釈科学としての美術史』の形成―ゼンパー、リーグル、パノフスキー」『カリスタ』第12号、2005年、53～56頁。

3 Dieter Wuttke ed., “Erwin Panofskys Leben und Werk,” *Erwin Panofsky: Korrespondenz,* Bd.1, Wiesbaden, 2001, p. XVIII, pp. 34–35.

4 Franz Wickhoff, “Die Wachsbüste in Lille,” *Die Schriften Franz Wickhoffs*, Max Dvořàk ed., Bd. 2, Berlin, 1913, p. 258.

5 Christian Hülsen, “Die Auffindung der römischen Leiche von Jahre 1485,” *Mittheilungen des Instituts für oesterreichische Geschichtsforschung*, IV, 1883, pp. 433–449.

6 Wuttke ed., *Erwin Panofsky: Korrespondenz 1910 bis 1936*, Bd. 1, 2001, pp. 28–29.

7 Henrry Thode, “Die Römische Leiche vom Jahre 1485: Ein Beitrag zur Geschichte der Renaissance,” *Mittheilungen des Instituts für oesterreichische Geschichtsforschung*, IV, 1883, pp. 75–91.

8 Louis Gonse, “Musée de Lille, Le Musée Wicar, Objets d’art: Téte de cire (Téte de cire du de temps Raphaël),” *Gazette des Beaux-Arts*, XVIII, 1878, pp. 204–205.

9 Max Dvořák, “Alois Riegl,” *Mitteilungen der K.K. Zentral-Kommission für Erforschung und Erhaltung der kunst- und historischen Denkmale*, Bd. III, Nr. 7, 8, 1905, pp. 255–276.

10 Franz Wickhoff, “Riegl, Alois,” Anton Bettelheim, ed., *Biographisches Jahrbuch und Deutscher Nekrolog*, Bd. 10 (1905), Berlin, 1907, pp. 110–112.

11 Wuttke ed., *Erwin Panofsky: Korrespondenz 1910 bis 1936*, Bd. 1, 2001, p. 30. ゴルトシュミットの実家（Mittelweg 153b）とヴァールブルクが1904年から住んだ住居（Heilwigstraße 114）はすぐ近くにあり、住居に隣接する土地に新しい文庫が竣工するのは1926年5月のことだった。Fritz Saxl, “The History of Warburg’s Library (1886–1944),” in: E. H. Gombrich, *Aby Warburg*, Oxford, 1986, p. 333.

12 Wuttke ed., *Erwin Panofsky: Korrespondenz,* Bd. 1, 2001, p. 38. パノフスキーが、ゴルトシュミットのゼミでドーラと親交を深めたのは間違いないだろうが、当時オイゲン・パノフスキー（Eugen Panofsky, 1855–1922）という銀行家がモッセ家の外戚になっていた。このタルノヴィッツ出身でベルリンの市参事会員を務めた人物はパノフスキーの親戚（叔父？）とされ、ドーラとの仲介者だった可能性もある。Elisabeth Kraus, *Die Familie Mosse: Deutsch-jüdisches Bürgertum im 19. und 20. Jahrhundert*, München, 1999, p. 332, p. 672, note 12.

13 Wuttke ed., *Erwin Panofsky: Korrespondenz*, Bd. 1, 2001, p. XIX.

14 Dora Panofsky, "The Textual Basis of the Utrecht Psalter Illustrations," *The Art Bulletin*, 25, 1943, pp. 50–58; "Narcissus and Echo; Notes on Poussin's *Birth of Bacchus* in the Fogg Museum of Art," *The Art Bulletin*, 31, 1949, pp. 112–120; "Gilles or Pierrot?: Iconographic Notes on Watteau," *Gazette des Beaux-Arts*, 39, 1952, pp. 319–340.

15 Dora and Erwin Panofsky, *Pandora's Box: The Changing Aspects of a Mythical Symbol*, London, 1956, 2nd ed., New York, 1962; "The Iconography of Galerie François Ier at Fontainebleau," *Gazette des Beaux-Arts*, 52, 1958, pp. 113–190. 尚この論文のフランス語版が、単行本として刊行された。Traduit par Alix Girod, *Étude iconographique de la Galerie François Ier a Fontainebleau*, Brionne, 1992.

16 ドーラの著書としては、共著の『パンドラの匣』のみ二種類の邦訳（阿天坊耀他訳、美術出版社、1975年。尾崎彰宏他訳、法政大学出版局、2001年）が刊行されている。モッセについての邦語文献として、亀卦川浩「人物素描モッセ」『日本歴史』251号、吉川弘文館、1969年、111～115頁。安藤淳子「アルベルト・モッセと日本」『日独文化交流史研究』6号、2003年、17～25頁等がある。

17 1870年代初めベルリンに、モッセ兄弟によって二つの会社が経営されていた。四男ルードルフは、1872年にベルリナー・ターゲブラットという新聞社を創設している。E. Kraus, *Die Familie Mosse*, 1999, p. 178, p. 242.

18 安藤淳子「アルベルト・モッセと日本」2003年、18頁。

19 安藤前掲書、20～21頁。Albert und Lina Mosse, *Fast wie mein eigen Vaterland: Brief aus Japan 1886–1889,* ed. Shiro Ishii usw., München, 1995, p. 385.

20 安藤前掲書、21頁。A. und L. Mosse, *Fast wie mein eigen Vaterland*, 1995, pp. 488–489.

21 Werner Mosse, "Albert Mosse: Der Mensch, seine Familie und Laufbahn," in: *Fast wie mein eigen Vaterland,* ed. S. Ishii, München, 1995, pp. 26–27.

22 Albert und Lina Mosse, *Fast wie mein eigen Vaterland*, ed. Shiro Ishii usw., 1995, p. 238, p. 447. 尚このモッセの滞日中の書簡集は、法学者の石井紫郎、坂井雄吉等によって編纂された。

23 E. Kraus, *Die Familie Mosse,* 1999, p. 572.

24 Emily Levine, "PanDora, or Erwin and Dora Panofsky and the Private History of Ideas," *The Journal of Modern History*, 83, 2011, p. 763.

25 Patricia Mazón, *Gender and the Modern Research University: The Admission of Women to German Higher Education, 1865–1914*, Stanford, 2003, p. 2. ヘレーネ・ランゲによって、高等女学校卒業者を対象としたアビトゥーア取得を目指すギムナジウムコースがベルリンに開設されたのは1893年のことであり、1908年の「プロイセン女子中等教育規定」によって、このコースが制度化された。佐藤公「19世紀ドイツ第二帝政期における女子中等教育制度改革（2）」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』4号、2014年、162頁。

26 E. Kraus, *Die Familie Mosse*, 1999, pp. 571–573.

27 ゴルトシュミットの評伝には、その下で1912年から1932年まで学位を取得した54名の名前が列挙されている。その中にはヴィットコウアー（1923）やヴァイツマン（1929）、そして1932年に最後に学位取得した民俗学者の佐野一彦（1903–1997）の名前もあるが、ドーラの名前は見当たらない。Marie Roosen-Runge-Mollwo ed., *Adolph Goldschmidt 1863–1944: Lebenserinnerungen*, Berlin, 1989, pp. 219–220.

28 ベルリン大学神学部で、1925年に女性で最初に学位を取得したのが、後の立教大学教授三浦スタンゲ・アンナ（Anna Miura-Stange, 1894–1967）である。1920年代はドイツの大学で女性が学位を取得し始めた端境期にあたる。伝記によると、アンナは師範学校を卒業後、数年間の教職を経てベルリン大学のアドルフ・ハルナックの下で学んだという。美濃部綾子『三浦アンナ夫人伝』大地社、1968年、5頁。従ってマルタ同様、アビトゥーアを持たずに学位を取得した可能性がある。在学中は、ゴルトシュミットのレンブラントに関する講義も聴講していたという。辻成史「忘れえぬ人々（1）」『エクフラシス』4号、2014年、8頁。

29 E. Kraus, *Die Familie Mosse*, 1999, pp. 581–582. 安藤「アルベルト・モッセと日本」2003年、23頁。当時の駐独大使は、ナチスに広い人脈をもつ大島浩だった。

30 K. Michels & M. Warnke ed., "Vorwort," *Erwin Panofsky: Deutschsprachige Aufsätze I*, Berlin, 1998, p. X; Wuttke ed., *Erwin Panofsky Korrespondenz,* Bd. 1, 2001, pp. 54–58.

31 Gerda Panofsky, "Einführung der Herausgeberin," in: Erwin Panofsky, *Gestaltungsprincipien Michelangelos*, Berlin, 2014, pp. 1–2. 尚ハイデルベルク大学に提出予定だった論文は、"Der Westbau des Doms zu Minden"と題して、1920年の『芸術学便覧』42号に発表された。K. Michels & M. Warnke ed., *Erwin Panofsky: Deutschsprachige Aufsätze I*, 1998, pp. 5–30.

32 Wuttke ed., *Erwin Panofsky: Korrespondenz*, Bd. 1, 2001, p. 66. ハンブルク大学は1912年12月に市長メッレによって提案され、翌年に設立委員会が創設、1919年5月10日に開校した。当初は哲学部と数学・自然科学部のみの構成だった。W. Weygandt, *Die Universität Hamburg in Wort und Bild*, Hamburg, 1927, pp. 8–11.

33 Horst Bredekamp, "Ex nihilo: Panofskys Habilitation," in: Bruno Reudenbach ed., *Erwin Panofsky: Beiträge des Symposions Hamburg 1992*, Berlin, 1994, p. 34.

34 Erwin Panofsky, “The History of Art,” in: Rex Crawford ed., *The Cultural Migration: The European Scholar in America,* Philadelphia, 1953, p. 99.

35 Wolfgang Panofsky, *Panofsky on Physics, Politics and Peace*, 2007, pp. 3–4.

36 H. Bredekamp, “Ex nihilo: Panofskys Habilitation,” in: *Erwin Panofsky*, 1994, p. 35.

37 *Ibid*., p. 35. この講義内容は、1921年の『芸術学月報』14号に、“Die Entwicklung der Proportionslehre als Abbild der Stilentwicklung”と題して活字化された。K. Michels & M. Warnke ed., *Erwin Panofsky: Deutschsprachige Aufsätze I*, 1998, pp. 31–72.

38 このヴィントの学位審査はパノフスキーが担当した最初の学位論文で、タイトルは、「美学的、芸術史的対象：美術史の方法論への寄与（Ästhetischer und kunstwissenschaftlicher Gegenstand. Ein Beitrag zur Methodologie der Kunstgeschichte）」だった。K. Michels & M. Warnke ed., *Erwin Panofsky: Deutschsprachige Aufsätze I*, 1998, p. XI.

39 この一節は、1968年11月3日付のヴィントからヘクシャー宛の手紙からの引用である。William Heckscher, “Erwin Panofsky: A curriculum vitae,” *Record of the Art Museum Princeton University*, Vol. XXVIII, No. 1, 1969, pp. 12–13.

40 Uta Nitschke-Joseph, “A Fortuitous Discovery: An Early Manuscript by Erwin Panofsky Reappears in Munich,” *Institute for Advanced Study*, June 12, 2013, p. 2. 発見された論文は、近年タイプ原稿の写真版と組み合わされて出版されたErwin Panofsky, *Gestaltungsprincipien Michelangelos, besonders in ihrem Verhältnis zu denen Raffaels*, Gerda Panofsky ed., Berlin, 2014.

41 Gerda Panofsky, “Einfühurung der Herausgegeberin,” in: *op.cit*., 2014, pp. 3–4.

42 パノフスキーの住居は、1928年初め頃から大学にも近く内アルスター湖畔沿いのアルテラーベン・シュトラーセ34番地にあった。それ以前は、より北寄りのアルシュテルハウスゼー11番地である。Wuttke ed., *Erwin Panofsky Korrespondenz,* Bd. 1, 2001, p. 250.

43 W. Heckscher, “Erwin Panofsky,” *Record of the Art Museum Princeton University*, Vol. XXVIII, 1969, p. 13. パノフスキーは、最終的にハンブルク大学でハイデンライヒ（1929）等40人ほどに学位を出すが、学位取得まで至らなかったジャンソン、大学教授資格論文を提出したトルナイ（1929）やヴィント（1929）などもおり、師弟関係については後述する。Ulrike Wendland, “Arkadien in Hamburg: Studierende und Lehrende am Kunsthistorischen Seminer der Hamburgischen Universität,” in: *Erwin Panofsky: Beiträge des Symposions Hamburg 1992*, 1994, p. 23.

正誤表

121 頁 12 行目　　エドガー・ヴィント→エトガー・ヴィント